

原 小 繁 盛 記

令和8年10月6日

呉市立原小学校
校長 梶本浩史

〈「本物」に出会う一日〉

— 原小学校 芸術鑑賞会 —

「うわあ、何が始まるんだろう！」

体育館に入ってきた子供たちの目は、いつもとは少し違っていました。体育館前方には、これから始まる演劇の舞台セット。始まる前から、子供たちはわくわくした様子で舞台セットを見つめていました。

10月3日（土）、原小学校では、芸術鑑賞会を行いました。実は、本校でこのような芸術鑑賞会を行うのは、ここ何年もなかったと聞いています。そう考えると、今日は原小学校にとって、まさに「特別な一日」だったと言えるでしょう。

○「本物」だからこそ伝わるもの

今回、子供たちにみてもらったのは、テレビや動画ではありません。プロの劇団「風の子九州」の皆さんによる、目の前で繰り広げられる生の演劇です。

劇が始まると、子供たちは一気に物語の世界へ引き込まれていきました。低学年から高学年まで、どの子も集中して舞台を見つめ、気が付けば多くの子供たちが前のめりになっていました。おもしろい場面では、体育館に笑い声が起こります。劇団員の方からの問いかけに子供たちが応じる場面もあり、単に「劇をみる」というよりも、劇団員と子供たちが一緒になって舞台をつくっているような時間となりました。

やはり、「本物」には力があります。声の大きさや響き、表情、体の動き、間の取り方……。画面を通して見るだけでは分からないものを、子供たちは目の前で感じ取っていました。

「人って、こんなふうに表現できるんだ。」

「演じるって、こんなにおもしろいんだ。」

そんな驚きや発見が、一人一人の心の中に生まれていたのではないのでしょうか。

○芸術には「正解」がない

学校では、問題を解いて「正解」を見つけることがたくさんあります。しかし、芸術には、必ずしも一つの正解があるわけではありません。

「おもしろかった。」

「すごかった。」

「ちょっと不思議だった。」

「自分もやってみたい。」

感じ方は、一人一人違ってよいのです。だからこそ、芸術に触れることには大きな意味があります。自分の心が動いた瞬間を大切に、自分なりに感じ、考え、表現す



る。そうした経験は、テストの点数だけでは測ることのできない、子供たちの豊かな心を育てていくものだと思います。

今回の鑑賞会が、子供たちにとって「みるだけの行事」ではなく、「何かを感じ、何かを考え、自分の世界を少し広げる時間」になっていれば、これほどうれしいことはありません。



○学校だけではできない学び

今回の芸術鑑賞会には、もう一つ大切な意味がありました。それは、保護者の皆様や地域の皆様にも一緒に鑑賞していただいたことです。子供たちと大人が同じ場所で、同じ舞台をみて、同じ時間を過ごす。そして、同じ感動を味わう。これは、学校の普段の教育活動だけではなかなかできないことです。

実際に、保護者や地域の皆様からも、「よかった」「子供たちにみせるべき芸術だ」といった声をいただきました。職員も含め、劇団員の皆さんの生の演技に圧倒される時間となりました。

「すごかったね。」

「どの場面がおもしろかった？」

「私はあの場面が好きだったよ。」

そんな会話が、今日の帰り道やご家庭で生まれていたら、うれしく思います。子供が感じたことを家族に話し、家族が感じたことを子供に伝える。学校で生まれた感動が家庭へ、そして地域へと広がっていく。そう考えると、芸術鑑賞会は単なる「学校行事」ではなく、学校と家庭、地域をつなぐ大切な時間でもあるのだと思います。

○心に残る「本物」との出会いを

今回の芸術鑑賞会は、PTA役員の皆様をはじめ、保護者の皆様、地域の皆様のご理解とご協力があって実現することができました。この場をお借りして、改めて心より感謝申し上げます。

そして何より、子供たちのあの表情を見ることができたことが、私にとって大きな喜びでした。舞台に釘付けになっている顔。思わず笑ってしまう顔。劇団員の方の投げかけに、夢中になって応える顔。そこには、教室の授業とはまた違う、「心が動いている子供たち」の姿がありました。

6年生にとっては、舞台セットや小道具と一緒に撮影した集合写真も、卒業まで残るよい思い出になったことでしょう。学校では、これからも子供たちにさまざまな「本物」と出会わせたいと考えています。

人の生の声を聴く。実際にものを見る。その場の空気を感じる。心を動かされる。そして、「自分もやってみたい」と思う。そうした体験の積み重ねが、子供たちの豊かな学びにつながっていくのだと思います。



今日、原小学校の体育館で生まれたたくさんの笑顔と感動が、子供たちの心のどこかに残り、これから先の「何かをやってみよう」という気持ちにつながっていくことを願っています。

今日は、原小学校にとって「本物に出会う一日」でした。